

孫に語る歴史

第5章
中世後期

谷川 修

第5章 中世後期

5.1 ヨーロッパ、西アジア

A. ヨーロッパ諸国の成立

イングランド・ウェールズ王国

1066年、夜空に彗星が現われた。その彗星を描いた刺繍(ししゅう)の壁掛けが、フランスのノルマンディー地方バイユーの教会に残されていた。壁掛けには、その年ノルマンディー公ギヨームが、アングロ・サクソン人を破ってイングランドを征服した物語が描かれている。今ではその彗星が、76年ごとに太陽の近くにやってくるハレー彗星だと分かっている。次回のハレー彗星は2061年に来る。こんどは君たちが見る番だ。

アングロ・サクソンの王は、若い頃デンマーク人に追われてノルマンディーに亡命していた。その王が死ぬと、遠縁のノルマンディー公が王位を要求し、ドーヴァー海峡を渡って侵略したのである。フランスに住みついたノルマン人の子孫である。英語でウィリアム征服王と呼ばれる王は、反抗する領主層から奪った領地をノルマン人の貴族に与えて、大陸式の封建制を敷く。征服者として土地台帳をつくらせ、王権を強めた。ノルマン人支配層は少数だったから英語が残る。それで、今でもイングランド人はアングロ・サクソン人と呼ばれている。王位は、今日まで、ウィリアム王の血筋の者が継いでいる。

封建時代、領主たちの領地獲得競争は波乱が多い。しかも、キリスト教徒の一夫一婦制から、しばしば兄弟が少なく、男子がないときは娘や娘の子が相続する習慣があった。ウィリアム王の第4子が3代目になると、長兄のノルマンディーも奪いとる。その娘は、フランスの有力領主アンジュー公と結婚した。1100年代中頃、その息子のヘンリー2世は、両親の領地を相続したばかりでなく、南西フランスの大きな領地を相続した女性と結婚する。イングランド王ヘンリー2世は、フランスの大西洋側の広大な領地を領有することになった。アンジュー家の紋章(エニシダ)にちなんで、プランタジネット朝と呼ばれる。王として、イングランドの諸制度を整えた。今日のイギリス・アメリカの陪審員裁判は、この時代にさかのぼるらしい。イングランドにフランス語が流入した。

ヘンリー2世は、王としてイングランドを所有するのだが、フランスの領地は、フランス王から封じられたものとして領有する。フランス王との微妙な関係が存在している。当時、フランス王がたいした領地をもたなかったのに対して、イングランド王の方は、ウェールズとアイルランドの一部にまで支配を広げていた。ところが、ヘンリー2世がイングランド王につくとき騒乱があったし、晩年には息子たちへの相続問題がからんで、国の支配がゆらぐことになった。末っ子のジョンがイングランド王になった頃には、フランス王と諸侯との戦争に敗れ、フランスの領地をほとんど失う。

ジョン王は、フランスでの戦争の費用をイングランド

で徴収し、イングランドの諸侯と対立する。1215年、諸侯が箇条書きにした要求に同意せざるを得なくなった。その条文をマグナ・カルタ(大憲章)と呼ぶ。明文憲法を定めなかったイギリスで、法の出発点として重要な意味をもつことになる。続く王たちも大憲章を承認して、王の権力を制限する伝統を生む。議会を招集して、貴族と聖職者の同意をとりつける慣習ができていく。のちには、議会に有力な都市民や騎士が入るようになる。少しずつだが新しい政治制度が芽生えてきた、と言えるだろう。それでも歴代の王は、領地拡大などの戦争に忙しかった。ウェールズが王国に合体される。

1300年代前半、王の野心からフランスとの百年戦争に入る。ヨーロッパの戦争で初めて大砲が使われた。その戦争に負けた1400年代後半に、こんどは、王位を奪う分家が出て、ばら戦争が起きる。紋章に白ばらと赤ばらを使った二つの家が王位を争う。中世後期のイングランドは、戦争のために発展が遅れたのかもしれない。

フランス王国の統合

フランスは、古いケルト文化の上にローマの文明がかぶさっている。さらに、こんどは北からフランク人が支配を広げたので、北部と南部では文化に少し差がある。北の小領主であったカペー朝の歴史は、1100年代末以来、諸侯を打ち負かして領地を広げ、王権を強める歴史であった。イングランドのジョン王との戦いで、その勢力をフランスからほとんど追い出して、領地を拡大させる。

南フランスに広まったキリスト教の一派を、異端として弾圧するアルビジョワ十字軍は、南へ支配を広げることになる。領地の相続権をもつ女性との結婚も領地を拡大させた。1300年初めまでの100年あまりのうちに、フランスの大半を王の領地とし、王権が強くなった。

王が大領主になると並行して、官僚組織が整えられて、王国の支配はさらに強まる。王の権威は、しだいに封建領主たちを圧倒するようになり、ローマ教皇とも対抗できるほどになる。1300年代初め、フィリップ4世は、教皇庁をローマからアヴィニョンに移した。教皇のアヴィニョン捕囚は1370年代まで続く。この王がローマ教皇と対決するとき、国内の支持をとりつけるために、議会が招集された。聖職者、貴族、平民の3身分の代表を招集したので、3部会という。これが前例となって、国の重要問題を3部会で議論することが慣習となる。王が国税を徴収しようとするれば、議会の承認が必要である。こうして、フランスでも新しい政治制度ができていく。

ヨーロッパの王家は、たがいに競争する関係にありながら、婚姻関係をむすんで封建諸侯への権威を保とうとした。1300年代初め、イングランド王の妃はフィリップ4世の娘であった。その王妃の兄弟であるフランス王に子がないまま続いて死ぬと、フィリップ4世の甥(おい)が王位を継いだ。ヴァロワ朝の始まりである。すると、フィリップ4世の孫のイングランド王が、王位継承権を主張して、1339年フランスとイングランドとの戦争になった。

プランタジネット家がフランスの領地を取りもどそうとする。長く敵対関係が続き、百年戦争と呼ばれる。

戦争は、イングランドがフランス南西部の領地をかなり取りもどして、1300年代半ば過ぎいったん停戦する。両国とも国内に紛争があった。1400年代に入って後半戦が始まる。イングランドは初め優勢で、北フランスを占領していく。ヴァロワ家は窮地に立った。そこに、ジャンヌ・ダルクという少女(十代後半)が現われて、フランスが反撃を始めるきっかけをつくる。結局フランスが勝利し、イングランド王は、ドーヴァー海峡対岸のカレー市だけを残して、大陸の領地を失う。ところで、ブルゴーニュ公は、毛織物業で産業の進んでいた北のフランドルと、神聖ローマ帝国領内とに領地をもっていたが、フランス王の臣下という立場を脱することができなかった。

長い戦争は、戦場となったフランスを弱めた。1300年代中頃ヨーロッパをおそったペストも、人口を減少させた。農業生産はさまたげられ、飢饉(ききん)や反乱などの混乱が生じた。けれども、ばら戦争をしたイングランドよりは早く、1400年代後半に、安定した発展の道を進み始める。

ドイツ (神聖ローマ帝国)

オットー1世がローマ皇帝の冠をさずけられたことで、東フランク王国は地域的な王国というより、ローマ帝国のあとを継ぐという考えを生むことになった。ただし実態は、多くの封建諸侯が分立する帝国である。世襲的な

王が続いている時代には、帝国内の教会組織を支配する権限をもち、それが帝国を統治する働きを果たした。しかし1100年代中頃になると、ローマ教皇が、聖職者の任命権を主張して皇帝と争うようになる。教会領地は封建的に封じられた領地だけれど、皇帝の教会支配権はしだいに失われていく。他方で、1200年代、帝国の東に植民する活動が始まった。ドイツ騎士団が結成されて、バルト海沿岸地域を征服し、植民地を広げていく。

1200年代半ば、比較的安定に皇帝位を継承することが終わる。その後は、有力諸侯による選挙で皇帝を選ぶようになった。ついで、選帝侯と呼ばれる7人の大領主が選挙によって皇帝を選ぶ習慣ができた。3人の大司教が含まれる。ベーメン(今のチェコ)はスラブ人地域で、もともと東フランク王国になかったので一つの王国だったが、その王も選帝侯である。東フランク王国に属していた諸侯は、大領主でも王を名乗れなかった。選帝侯には大きな自治権が与えられた。やがて、諸侯や大きな都市が、皇帝の権力から自立して、領地を国に準じるような形で支配するようになっていく。領邦国家と呼ばれるものだ。1400年代にはハプスブルク家が帝位につくようになる。この時代に、スイスが自立した国になっていった。

帝国は自立的な領邦国家の集まりのようになっていたのに、昔を懐かしんで、国王文書で神聖ローマ帝国という名が使われた。それでも、帝国内の人々が一つの国の民だという考えは保たれて、ドイツという呼び名が生まれることになる。

イタリア

イタリアの中央部では、ローマ教皇領が、宗教的権威をもつ領邦国家として長く存在した。北部は、神聖ローマ帝国の範囲に入れられ、いつも皇帝がイタリア領有をめざしたけれど、征服されずに多くの地域の自立した状態が続く。南部は、ノルマン人の建てたシチリア・ナポリ王国を、血縁によって神聖ローマ皇帝の息子が継ぐ。ところが1200年代後半、神聖ローマ帝国と対立していたローマ教皇とむすんで、フランス王の弟が国を奪う。するとシチリアでは反抗が起きて、イベリア半島のアラゴン王がその支配権を獲得する。1300年代からは、ナポリ王国とシチリア王国に分かれることになった。

ローマ教皇は世俗権力と対立して、1000年代には、イングランドのジョン王や神聖ローマ皇帝を破門するという事件も起きている。その勢力は、1200年代に最も強大になった。しかし1300年代に入ると、フランス王に屈して、アヴィニオンに連れて行かれた。北部では、ヴェネツィア・ジェノヴァが、1000年代以来、西アジアの地中海沿岸地域との交易で栄えた。この二つの都市とミラノ・フィレンツェなどが、自治権をもつ大きな都市国家になって、中世後期のヨーロッパの経済的な中心として発展する。

しかしイタリアは、外国の王たちとローマ教皇との支配欲の争いの中で、各地域の分立した状態が長く続く。教皇領をはさんで、北部と南部で性格の違う二つの地域

として歴史を歩む。北部は商業的に栄えた都市国家群で、南部は王権による支配地域である。現代もこの地域的な違いが残っている。北部の都市国家はもとは共和国だったが、他の都市との争いも激しく、しだいに一つの家が支配的な地位につくようになる。地中海交易の覇者ヴェネツィアは、例外的に共和国のままであった。

イスパニアとポルトガル

イスラーム帝国がイベリア半島を征服したとき、西ゴートの貴族たちは北部やピレネー山脈などに逃げて、完全には征服されなかった。750年頃から300年間、後ウマイヤ朝が支配した時代、北部の人々は征服されなかった地方に五つの国をつくった。1000年代半ば後ウマイヤ朝がほろびると、キリスト教徒は失った国土を取りもどし始める。征服はカイコが桑の葉を食うように進み、1200年代中頃にあらかた終了する。南部の地中海沿岸に、イスラームのグラナダ王国が長く残ったが、ついに1492年、グラナダが落ちて再征服が終わった。その宮殿に入城したカスティーリャ王国の女王は、ユダヤ教徒を国外へ追放する命令を出した。美しいアルハンブラ宮殿は今も残っていて、名高いギター曲がものうい調べを奏でる。

再征服が終わってみると、婚姻関係などによって、イベリア半島は二つの王国になっていた。カスティーリャ・アラゴン王国はやがてイスパニア(スペイン)になる。もう一つはポルトガルである。

東ヨーロッパ

東ヨーロッパでは、1000年頃成立したハンガリー王国とポーランド王国が1400年代まで続いた。1200年代にバルト海沿岸に形成されたドイツ騎士団領が、しだいに拡大していく。さらに東側にはキエフ公国があった。東スラブ人の国だけれど、公家はノルマン人の出だ。ロシアの古い名はルーシーといい、ノルマン人の支配者に由来するという説がある。ルーシーにはビザンツ帝国のキリスト教つまりギリシア正教が入った。

1200年代半ば、チンギス・ハンの孫のバトゥのひきいるモンゴル軍が、東ヨーロッパに侵入した。神聖ローマ帝国領内のワールシュタットで、ドイツ・ポーランド軍はモンゴル軍に敗れる。モンゴル軍はハンガリーを圧倒するが、モンゴルのハン(皇帝)が死んで遠征は中絶し、ヨーロッパはモンゴルとのそれ以上の対決をまぬがれた。しかしバトゥは、ヴォルガ川下流のカスピ海のほとりに“幕舎”を置いて、キプチャク・ハン国を建てた。ルーシーの諸侯国は属国となり、税を納めなければならない。モスクワ大公国が自立性を高めるまでに100年かかる。さらに100年以上のちの1400年代後半、イヴァン3世のときやっと独立する。まだ王国ではないがツァーリ(皇帝)を自称して、ロシア帝国への歩みが始まる。

中世ヨーロッパの社会と文化

中世ヨーロッパには、かつてのローマ帝国のような大

きな政治体制は形成されなかった。中国の帝国制とは違う文明を生むことになる。東ヨーロッパの奥の方に陸地が開けているだけで、複雑な海岸線と山脈でいくつもの地域に分かれている地理的な要因が考えられる。それに、自立性の強い独特の封建体制と、昔のギリシア・ローマの民主政や共和政の前例とが、諸国家の分立をもたらした。多くの国々の競争は、経済的な発展をうながす。人々が独立心に富むことが、都市と市民の形成を助けたのだろう。同時代のほかのどこよりも西ヨーロッパで、社会の発展に参加する市民が生まれつつあった。

キリスト教の熱情は、イェルサレムの回復という名分を立てて、1100年頃からの西アジアへの十字軍派遣になった。領土的な野心がその裏にはあった。封建領主と騎士たちは、東地中海に領国を築いたり、ビザンツ帝国を一時的に占領したりする。ヨーロッパ内では、南フランスの少数派の弾圧とイベリア半島でのイスラーム勢力との戦いに向かい、各地で異端審問などの過激に走った。しかし1300年代後半になると、イギリスでオックスフォード大学の聖職者であったウィクリフが、権威主義的な教会への批判を始める。その影響を受けたパーメンのフスが、その地で宗教運動をおこした。これに対し、分裂していたキリスト教会を再統合する公会議が開かれる。フスは異端として火あぶりの刑にされた。

1000年を過ぎると、遠隔地の商業取引が活発になり、多くの都市が生まれる。北イタリアの諸都市は、早くか

ら東地中海(オリエント)との貿易を進めていた。十字軍遠征はその交易をさらに刺激する。北海とバルト海沿岸では、1200年代から多くの自治都市が連合して、さかんに交易するようになる。パリの東方シャンパーニュやドイツのアウグスブルグを中心とする地域などが、交易の中継地として栄え、フランスの北のフランドルでは、いち早く毛織物業などの産業がおこった。やがて、西ヨーロッパ全体に経済的なネットワークが形成されていった。貨幣経済が行きわたり、諸国を結ぶ金融業が生まれる。発展の中で、西ヨーロッパに、契約という考えが根付いたことも見のがせない。それは、法律による政治へ向かわせる。こうして中世の終わる頃までに、西ヨーロッパは、諸国が分立しながら一つの大きな領域として結びついて、膨張する条件がととのっていた。

西ヨーロッパの都市は、たとえばドイツでは税を納めて皇帝の保護を受け、封建領主から自立する。そこでは、商人や同業の職人の組合(ギルド)がつくられた。イタリアでは、都市の有力者が周辺の農村を領地として支配した。都市は自治組織によって運営された。ドイツの古い都市は、中心に広場があって今でも昔の面影を残している。木の柱や梁で構造を組み立て壁を塗りこめた建物もあって、日本の家と似た感じがする。しかし、都市はレンガや石で組まれた城壁で囲まれていて、教会や大きな建物がやはり石などで建てられている。今も残っている教会はたいいてい、天に背伸びした尖塔をもつゴシック様式の建物だ。こういう耐久性のある建造物が、日本と違う景

観を与える。でも、中世ヨーロッパの都市人口は、それほど多くはなかったのだ。

中世ヨーロッパでは、ローマ帝国のラテン語が国際語であり、学術的な書物はラテン語で書かれた。この時代の学問はスコラ学と総称される。アンセルムス、アベラール、トマス・アキナスなどの名が、歴史の教科書に載っているけれど、おじいさんは読んでいない。1200年代、イングランドのロジャー・ベーコンは、自然科学へつながる考察をした。民間の説話や伝説が、国々の言葉で書物にされて、それぞれの国の古典になっている。忘れてならないのは、大学がつくられるようになったことだ。1000年代後半、先進のイタリア北部ポローニャで、最初の大学が市民たちによって設立された。続いてオックスフォードやパリなどに大学がつくられていく。大学という言葉のもののラテン語は、学生の組合を意味するそう。つまり、中国や日本での朝廷の学問所である大学よりも、自律的だったことを示している。

1300年代に、先頭を走っていたイタリアで、ルネサンスの最初の花が咲いた。フィレンツェでは、政争から亡命生活を送ったダンテが長編の叙事詩『神曲』をつくり、ペストが流行してひどい人口減少が起きた頃、ボッカチオはヨーロッパ最初の近代小説『デカメロン(十日物語)』を書いた。ついでイングランドのチョーサーが、『カンタベリー物語』を書く。イタリアやフランドルでは、1300年代から、技法の進んだ絵が描かれ始める。

B. イスラーム世界の変遷

セルジューク朝

現代、中央アジアの国々を中心にユーラシア大陸の広い範囲にわたって、テュルク語系の言葉話す人々がいる。昔モンゴル高原にいて、中国で突厥(とっけつ)と呼ばれた遊牧民がこの系統である。今のトルコ国は、テュルク系の人々が西アジアにまで進出してきたことに始まる。その人々をトルコ人と呼び、広義のテュルク人と区別することにしよう。

1000年頃、アラル海付近にいたテュルク系遊牧民は、イスラーム教徒(ムスリム)になった。その中からセルジュークという人物が、遊牧民を戦士の集団にまとめ上げて、歴史に登場する。南へ支配を広げた孫の世代は王朝を建て、今のアフガニスタン・イランまで征服する。1055年にはバグダードに入城し、イスラーム教の権威者であるアッバース朝のカリフから、スルタンの称号をさずけられた。バグダード付近のカリフの領地をのぞき、イスラーム世界を支配する世俗王の地位である。西アジアでも、北の遊牧民が侵入して国を建てるのが起きたのだ。

セルジューク朝は、シリア・パレスティナとその南のメッカを含む紅海東岸にまで覇権を広げ、北でもビザンツ帝国からアナトリア(トルコ)の東半分を奪い取る。この帝国は、統一的に支配する整った政治体制がなく、定まった首都をもたなかった。官僚には以前のようにイラン人が登用され、宮廷ではペルシア語が話された。前代の

制度をひき継ぎ、支配階級に土地の徴税権を与えた。やがて、軍隊を奴隷の軍人(マムルーク)で組織するようになり、マムルーク出身者が高い地位に登ることになる。

西アジア世界の統一は、イスラームの学芸をふたたび進展させた。おじいさんはよく知らないから、ウマル・ハイヤームの名だけをあげておこう。イスラーム世界で広い分野の科学に貢献したイラン人だ。その詩集『ルバイヤート』は世界中に知られていて、日本語にも翻訳されているよ。

セルジューク帝国では地方権力が強く、マムルーク出身の総督たちも権力をにぎり、地方分権的な支配であった。やはりスルタンの位をめぐる騒乱があった。1100年代初めふたたび支配を強めたスルタンが出たが、彼の死んだ1100年代中頃、帝国はほとんど分解した。1200年前に、イラク周辺を支配していた王家が滅亡する。

スルタンによる支配の初期、王族の一つがアナトリア東部を分立した王国にした。ルーム・セルジューク朝と呼ばれる。この王朝もテュルク(トルコ)系だ。モンゴルに敗北する1200年代中頃まで、ほぼ安定した支配を続けた。支配地を求めるトルコ系の人々が流入し定住して、アナトリアのトルコ化が進んだ。のちにもトルコ人が国を建て、トルコというのが地名になるのだ。

アナトリアの東半分を失ったビザンツ帝国は、ローマ教皇に援軍を求めた。キリスト教化されていた西ヨーロッパは、政治的・社会的な情勢にもうながされて、聖地

イェルサレムをトルコ人から奪い返すという運動を起こし、十字軍を派遣する。ヨーロッパ世界と西アジアの対抗する構図が、中世後期にも続いていくのである。十字軍は何度か結成された。野心的な西ヨーロッパの領主と騎士たちによって、シリアからパレスティナにかけていくつかの国々が建てられたが、1200年代末までにイスラーム世界にもどる。

イル・ハン国とティムール帝国

1200年代初めまでアッバース朝カリフはいた。アラル海の南にテュルク系ムスリムが別の王朝を建て、イランまで支配を広げ、アフガニスタンではイラン系ムスリムが王朝を建て、インド北部まで支配した。これ以後、インド北部にイスラームの国ができるようになる。

そういうところへモンゴルが侵入してきた。1220年代にアフガニスタン・イラン東部を征服して、1250年代チンギス・ハンの孫フレグがさらに西に進む。ムスリムでないモンゴル人は、アッバース朝もほろぼす。しかし、フビライ・ハンが位につくときのモンゴルの内乱で膨張は止まり、自立的な国になった。イル・ハン国という。すでにモンゴルに負けていたルーム・セルジューク朝のトルコも服従させた。都をイランの北西部に置いて、イラン・アフガニスタンからアラル海の南まで支配する。

イル・ハン国の支配層も、遊牧民を軍事的に組織した連合的な集団で、それまであったイラン人などの社会を軍事力で支配するのである。寄せ集め的だった支配層の

あいだに対立がある一方で、しだいにイスラーム化が進む。1200年代末に立ったハンはイスラーム教に改宗し、結局イスラーム的な国になった。支配の仕方も西アジア伝統のやり方に変えていった。軍隊が税を取りたてるやり方から、行政的に地租を取るようになり、支配層にその徴税権を与えた。イラン人も登用された。

しばらく安定期があったが、1330年代に、国を建てたフレグ直系のハンが死ぬと、モンゴル人の諸勢力が争いを始め、イル・ハン国は分解した。もともたにいるイラン人勢力も地方政権を建てるようになった。

中央アジアには、モンゴルの子孫たちの争いで、なかなか安定した国ができなかった。一時的にチャガタイ・ハン国ができたが、それも分裂してしまう。その西部地域で、ムスリムになったモンゴル人は、先住のテュルク人とまじりあっていた。その中からモンゴルの末裔という男ティムールが、アラル海の東南地域で覇権をにぎると、チンギス・ハンのように世界征服にのり出した。

ティムールは、1370年から10年ぐらいで、中央アジアを平定する。さらにイランの西まで遠征して、以前のセルジューク朝の領域を征服する。彼の遠征軍は、ロシアの南へ行き、インドのデリーまで侵略し、トルコ方面でも戦果を上げて、1400年頃にはとても大きな帝国になった。根拠地のサマルカンドから支配する。しかし、この帝国も、支配地を一族に分配する遊牧民の伝統に従ったので、それほど統一的な国ではなかった。1400年代後半

には二つに分裂して、衰えていった。

中央アジアに、整備された都市が建設され、文化が花開いた。サマルカンドに残されている美しい建物が、その文化の高さを証言している。細密画など、イスラーム世界に独特な絵画もこの時代に発達した。インドにもその影響がみられる。

北アフリカとイベリア半島のイスラーム諸国

900年代に北西アフリカに成立したファーティマ朝は、東へアッバース朝の領土を奪い取っていき、1000年代にはエジプトを中心とする国になった。現代に続く都市カイロが建設されて首都となった。1100年代後半、十字軍に対抗する動きが強くなり、シリアにトルコ系の政権ができた。そこからファーティマ朝エジプトに派遣された人物が、権力をにぎりアイユーブ朝を建てた。クルド人だそうだが(現代、クルド人はトルコ・イラク・イランの国境地域にいるが、自分たちの国をもていない)。アイユーブ朝はシリアまで支配を広げたが、ここでも領地を分配された一族のあいだの対立が続いた。

1200年代中頃、最後の王はトルコ系のマムルーク軍団を買い入れたが、十字軍との戦いの中で死ぬと、そのマムルークたちが、クー・デターを起こして新王朝を建てた。マムルークの王朝は、十字軍を圧倒し、イル・ハン国の進出をくい止めることができた。しかし、繁栄していた経済は、ペストの流行した1300年代中頃から傾くようになる。政治体制もスルタンを選挙で選ぶように変わ

り、軍閥たちの競争の時代になった。

北西アフリカとイベリア半島を支配したイスラーム王朝のことに触れておこう。アラブ人のファーティマ朝の後には、1100年代に、ベルベル人がイスラーム王朝を建てた。ベルベル人というのは、書かれた歴史以前にヨーロッパからジブラルタル海峡を渡って北西アフリカに住んだ人々だ。今度はジブラルタル海峡を南から北に渡って、海峡の両側の広い地域を支配した。1200年代には、やはりベルベル人の別の王朝ができた。このムワッヒド朝のとき、イベリア半島コルドバ出身のイブン・ルシュドという学者が現われて、哲学・医学などさまざまな学問領域について書物を書いた。中でも、アリストテレスの数多い著作の注釈書をつくったことが重要だ。それは、イベリア半島のヨーロッパ人によってラテン語に翻訳され、ヨーロッパ世界にギリシア古典の再評価をうながすことになる。

1300年代には、イベリア半島南岸のグラナダにイスラーム王朝が残っているだけで、北西アフリカには大きな王朝はなかった。それでも、今のスペイン（イスパニア）のコルドバの遺跡やグラナダのアルハンブラ宮殿の写真をみると、そこでの文化の水準が高かったことが分かる。そういう中で、もう一人の大学者イブン・ハルドゥーンが現われた。イベリア半島のアラブ人貴族でチュニスに亡命した家の出身である。いくつかの王朝に仕えたのち引退し、『歴史序説』などを書いた。単なる歴史書でな

く、人間の社会や文明を広く考察した書物で、のちのヨーロッパ人が「アラビアのモンテスキュー」と呼んだほどの著作である。モンテスキューに先立つこと300年以上。彼は、マムルーク朝のカイロに移住し、シリアに進軍してきたティムールと会見している。

イスラーム世界の人々は、イスラーム教が世界中に広がったのに並行して、イベリア半島・西アフリカから中国まで、世界中にわたる経済活動をした、ということを言い忘れてはいけないだろう。イタリア北部の諸都市の繁栄をもたらした地中海交易は、そのネットワークとつながっていた。アラビア商人たちは、アフリカ中部東岸のタンザニアあたりまで行き来した。

結局、ヨーロッパが国民国家的な国々を形成しつつあった時代、西アジアとエジプトを支配したのは外来の者たちで、北アフリカを含めて、住民たちが自分たちの領域によくまとまった国を形成するという傾向が少なかった。各領域はそれぞれの特徴をもつが、たいてい地方に部族的な傾向を残している。後世まで、中世的な考え方と行動が続き、イスラーム世界に国民国家をつくり出す条件はできなかつた、と言えるだろう。それでも、地中海とアラビア海との橋渡しとなる地域で、王朝が交代し混乱があるあいだも、経済活動はずっと活発だった。

5.2 中国の成熟、日本の中世

A. 中国の成熟

中世後期のヨーロッパの話をも、ハレー彗星で始めた。だが、中国ではすでに東周のころから彗星を記録していた。年代を分けて章を区切るのに、おじいさんはヨーロッパを基準にしているけれど、ユーラシア大陸の東と西で歴史のあり方や進み方は違う。古代の文明をよくひき継いで歴史を歩んできた中国は、ヨーロッパよりも早く成熟し、同じ中世という言葉を使うにしても状況が違う。

宋、中国の発展

900年代、華北で、五代の王朝が興亡をくりかえした。都は、一時期をのぞき今の開封にあった。南北を結ぶ運河と洛陽・長安へとつながる幹線道路との交差点にある。五代最後の後周に名君が出ると、皇帝直属の禁軍を強化して、周辺の国々の領土を切り取っていく。しかし中国統一の事業半ばで死ぬと、禁軍の司令官であった趙匡胤(ちょうきょういん)が皇帝になり、宋王朝を建てた。960年のことだ。新しい皇帝は、17年間の統一戦争を実行して、華南の国々を征服する。次の代に統一が完成する。100年間の分裂状態が終わった。

ただし、五代三番目の後晋が王朝を建てるときに、北の遼(契丹、きったん)の助けを求めて、北京周辺の16州を譲りわたしていた。それを取りもどす宋の戦争は失敗し、反撃を受けたので協定(澶淵の盟、せんえんのめい)が結ばれた。

宋を兄、遼を弟とするのだが、毎年多額の銀と絹を贈らなければならない。西北部には、チベット系の西夏(せいか)が国をつくっていた。西夏も負かすことができなくて、宋を君、西夏を臣とするのだが、同様に毎年銀・絹・茶を贈ることになった。ヴェトナムも自立したので、宋の領土は唐よりも小さかった。これは、対外戦争で人やお金を失う代わりに、物で安全保障を得るという現実主義的な政治選択だった、と見ることもできる。

中国文明は成熟の時代をむかえた。宋は、官僚の権限を分散して、皇帝に権力を集める体制を整える。地方の州・県へ任期付きの長官を中央から派遣し、それを監視する役もつくられた。皇帝直属の官庁が軍隊の上にある文治制であり、軍を発動する命令権が軍人になかった。これらの官僚は主に科挙(試験)よって選抜され、皇帝が合否を認定して、官僚の忠誠心をつくり出すようにした。近代日本で官僚を採用するときおこなわれた試験に似ている。宋の高官は進士の試験の合格者で占められる。この試験は、儒学の知識と文学的な教養を調べるもので、官吏はみな教養のある知識人であった。

こういう人々が宋の支配階級になって、唐の時代とは違う社会状況になる。新法党と旧法党と呼ばれる官僚層のあいだの政治闘争も起きた。王安石は、政治や財政の行きづまりの打開のために、革新的な新法を実施しようとし、司馬光などの保守的な旧法党のグループにはばまれた。しかしこの闘争は戦争ではない。詩人蘇軾(そしよく)

は、旧法党側にかつがれて左遷のうきめにあったけれど、失脚して南京に隠退していた王安石を訪ねている。人間的に尊敬していたのだろう。

宋代になると、長江下流域の広大な湿地や沼地を水田に変えて、耕地面積が増えたうえに、水稲栽培の技術も進んで、華南全域で生産量がうんと伸びた。華南の人口も増加した。国の統一は、商品の全国的な流通を助け、産業をさらに発展させる。農作物も商品として生産され、地域ごとの特産品が生まれた。代表的な絹や茶は、国際交易品になる。中国が最良の陶磁器を生産するようになったのも、宋の時代である。景德鎮や磁州が名高い。種々の鉱山開発も進む。石炭も流通して広く使われるようになったそうだ。

商業も発展し、農業の租税に比べられるほどの税収が得られるようになった。商人や職人が、行(こう)と呼ばれる同業組合をつくった。銅銭が大量に作られるようになる。世界で初めて、交子(こうし)と呼ぶ紙幣が発行された。農村に貨幣経済が広まり始め、小作ばかりでなく労賃で雇われて働く者や、副業をもつ者も出たようだ。

政治・軍事的な色彩の強かった都市も、商業都市の側面が強くなった。それまでの区画された都市になかった、通りに面した商店街が出現した。張択端という画家の描いた絵巻物「清明上河図」は、都の開封の繁栄ぶりをいきいきと描いている。開封は世界都市として栄える。そこにはユダヤ商人もいた。シルクロードへの玄関、今の

甘肅省の省都蘭州で漢族の人口が多数になったのも、宋の時代ということだ。南シナ海では、外国商人に加わって中国人が海外貿易にのり出し、広州や今の寧波などの貿易港が栄えた。1100年頃の中国の人口は推定でおよそ1億人、1500年頃のヨーロッパの推定約5600万人よりも多い。開封の人口は約100万人という推定がある。

中国で発明された火薬・羅針盤・活字(木製)は、1000年代に実用段階に達した。火薬と火器が実戦で使われるようになり、貿易船に羅針盤が備えられる。中国人は、磁石の針が南北を指すことを発見し、方角を示す羅針盤をつくったのだ。ヨーロッパは、中国から西アジアを通して伝わったこれらの技術を取り入れた。お隣の朝鮮半島の人々に敬意を表わすために、1200年代の高麗(こうらい)で銅の活字がつくられたことを言っておこう。

社会の成熟にあわせて、文化も一つの高みに達した。その文化と今話した社会の発展を見ると、日本の歴史家の見方に賛成したくなる。中国では宋の時代に近世が始まった、というのだ。その後の世界史の展開を見て、浅学のおじいさんが思いつく中国の弱点は、ヨーロッパにとってのギリシアの民主制のような手本がなく、専制政治の体制だったことだ。独立心の強い個人が、専制政治に対抗して発言権を増すことは起きなかった。そして、大陸北部の長い国境地帯に、いつも遊牧民がいて、軍事的に強い国ができたことである。

南宋

1100年代初期、みずから一級の画家であった徽宗(きそう)という皇帝が政治をおろそかにして、混乱が生じた。北では、今の中国東北部の奥から出た女真族が、衰えていた遼を倒して金を建てた。この戦争に介入した宋は処理を誤り、徽宗が政権を投げだして息子の欽宗(きんそう)を立てる。だが、金は1126年開封を落とし、徽宗と欽宗は捕えられて連行されてしまう。

危機におちいった宋は、翌年1127年欽宗の弟を皇帝に立て、華南を守って国を保つ。これ以後を南宋と呼ぶ。都は今の杭州に置かれた。宋王朝が保たれたので、金に対する戦争になったが、やがて戦争をやめるように主張する宰相が和平条約を結ぶ。今度の条約では、宋が金に対して臣下の礼をとって、やはり毎年銀と絹を贈ることになった。国境は黄河からかなり南に下がった。金との戦争もあったが、50年あまり比較的平穏が続く。

北からの侵略で、晋のときに多くの人々が江南に逃げたように、また多くの官人・軍人・庶民が江南に移住した。ふたたび江南の開発が進み、中国の経済的な重心ははっきりと南に移ることになった。

しかし金との対立は、宋の安全保障上の基本的な問題であることに変わりはない。1200年代になって、金がモンゴルに苦しめられるようになると、また戦争を始める。1230年代にモンゴルが金をほろぼすと、宋はモンゴルと敵対関係に入る。宋の国力は弱まりつつあった。

宋代の文化

各地の地主層で科挙の試験で官僚になるような人々が士大夫と呼ばれ、政治や文化をになう中心的な階層となる。個性的な知識人が思索を広げた。周敦頤(しゅうとんい)という人が、宇宙の生成過程を図式的に表現しようとし、弟子の程顥(ていこう)と程頤(ていい)の兄弟が、万物を生成する「気」や物の「理」へと思索を進めた。南宋の時代になって、朱熹(しゆき、朱子)がそれを集大成し、宇宙をつらぬく理と人間の本性を結びつけて考察した。宋学あるいは朱子学と呼ばれる。明代になると王陽明たちに批判され、近代の日本人にも朱子学は古いと思われたけれど、それまでの政治道徳的な儒教から、もっと普遍的な哲学へと発展したのである。人格的な神をもち出さないで、「理・性」を論じた宋学は、明の時代にヨーロッパに伝えられて、近代の啓蒙主義に影響を与えた。

知識人である士大夫が層をなすほど出現し、文学も盛り上がった。以前よりも知性的になったと言えるだろう。その代表が蘇軾だ。その詩を君たちにも読んでほしい。詩に加えて、歌う曲につける詞が盛んになった。蘇軾の「赤壁の賦」は、近代の作家の作品のような感じがする。南宋第一の詩人陸游は、金に対する主戦論を唱えたけれど、ロマンティックな詩も書いた。

美術でもすぐれた作品が生み出されるようになった。白磁や青磁の名品を見れば、その洗練ぶりが分かる。水墨画が発展し、山水画や花鳥風月がさかんに描かれるよ

うになった。画家だけでなく士大夫も絵を描くようになる。この傾向はみな日本に入ってきたから、宋の時代にも中国の影響が強かったことが分かる。

北の征服王朝

北の異民族が侵入してくることは、古代からの中国の地政学的な宿命であった。鮮卑族が北魏を建てみずから漢化され、隋・唐王朝に至ったあと、900年代初めに、モンゴルにいた契丹族(中国側の呼び名)が、自立して国を建てた。国名は遼あるいは契丹(きったん)。モンゴル高原の東部も征服し、日本と外交関係のあった渤海(ほっかい)をほろぼして、日本海にまで達する。後晋が国を建てたとき、北京周辺の領土16州も獲得した。

部族的な社会の遊牧民と、漢人と渤海人などの農耕民とを、二つの行政制度に分けて支配した。軍事的に強い国で、宋が悩まされたことはすでに話した。渤海湾沿岸は古代から中国の帝国に支配されたから、漢人もいただろうし、宋との交易からも漢化されて、中国式の都や仏教寺院などに中国の影響が現われた。しかし、伝統の生活や風習を残すなど、固有の文化を守ることに熱心であった。独自の契丹文字もつくった。これ以後の征服王朝もこれらの特徴をひき継ぐ。今の北京は、春秋戦国時代の燕の都で、中華帝国が領土を広げたときはいつも北の拠点都市であった。遼がこの地域16州を得ると、そこを南京と名づけた。

現代の中国東北部の北部には、昔の狩猟生活のなごりをとどめながら農耕生活をしていたツングース族がいた。その一派の女真族が、圧迫を受けていた遼に反旗をひるがえして、1100年代初め、金という国を建てた。しだいに他の部族も結集してついに遼を倒す。このとき、遼の王族は契丹人をひきいて西に移動し、中央アジアに西遼(カラキタイ)という国を建てた。遊牧民の移動距離は、日本人には想像もつかないね。金は、初め遼に対抗して宋と協力したが、両国の対立は避けられず戦争になる。金が優勢で、結局、宋から華北を奪ったのだ。

南に領土の広がった金は、1100年代半ば、都を燕京(北京)に移して統治するようになる。遼にならって、北の非漢族と華北の漢族を別の行政組織で支配した。新しく女真文字をつくった。しばらく比較的安定した時期が続いたが、1200年代に入ると、モンゴル族の活動が活発になり、宋がそれに乗じて戦争をしかけるようになる。金王朝は末期をむかえた。

元

モンゴルの人々は、テュルク系のウィグル国が衰退すると、モンゴル高原の北東部から広がった。いくつもの部族があったようだ。その中のモンゴル部に、名家の出でテムジンという男があった。没落していた家を興して氏族の長になり、ついで他の氏族を圧倒して部族の長になる。彼は、氏族や部族をこえて個人的なつながりを広げ、自分のまわりに強力な戦士の集団を築いていったの

である。さらに諸部族を征服し、1206年、モンゴル高原の遊牧民を統合する長に選ばれて、チンギス・ハンになった。新しい軍事的な組織をつくる。軍団を千戸単位で編成し、忠誠心のある者をその長とした。千戸には10の百戸、百戸には10の十戸があるというのは分かるね(笑い)。自分の親衛隊には、千戸長や百戸長などの子弟をあてた。モンゴル高原を統一したとき、95の千戸軍団ができたらしい。非凡なチンギス・ハンは、ウイグル文字を採用して、法令をつくり、国家体制を整える。それまでの遊牧民にくらべて、統制のとれた支配が敷かれた。

そこからモンゴル帝国ができていく。チンギス・ハンの生きているうちに、中央アジアとイランを征服し、さらにカスピ海の北とインダス川まで馬を進めた。西夏もほろぼした。放牧地を分配するように、帝国は息子たちに分配され、末子が父の領地を相続した。あたかも家畜を飼って生活を立てるように農耕民を支配したと見えるのは、おじいさんの僻目(ひがめ)だろうか。孫の代までに史上最大の領土をもつ帝国になった。すでに、ヨーロッパの東部と西アジアを支配したハン国のことは話した。

東アジアでは、次の代の1234年に、金をほろぼした。1250年代になると、チンギス・ハンの孫の第4代ハンは、弟のフビライに南宋を討つように命じる。南宋を包囲するために、まずその西南にあった大理国を征服。そこは、唐も支配できなかった領域だが、これ以後中国の領土に加わることになった。今の雲南省だ。チベットも従属さ

せる。唐がほろんだあと独立していた北ヴェトナムは、モンゴル軍の三度の侵入をしりぞけた。朝鮮半島では、高麗を打ち負かし従属国とした。このとき、高麗は日本の援軍を求めて太宰府へ使者を送っている。

1260年、フビライは、モンゴル帝国第5代のハンになった。都を燕京(北京)に移して大都と名づけ、国名を元とした。モンゴル帝国の統一的な支配はまもなく終わり、元は東アジアを支配する中華帝国に変わっていった。東アジアの国々は中華帝国に朝貢するのが慣例である。使者が何度も日本に送られたが、日本側は返事をしない。こうして1274年、高麗の軍勢をひきいた元が日本を攻めたのだ。1279年、元は南宋をほろぼした。1281年にもう一度日本へ遠征した話は日本のところでしょう。

元の世祖フビライは、皇帝になる前から、北京でかつての金の領域を支配していたが、元になってもその支配体制をもとに統治した。配下のモンゴル人を中央と地方の主要な地位につけ、早くから支配下に入った西方の目の色の違う人々も上層の官僚にした。その下に、金王朝の漢人を官吏として使った。あとで征服した南宋の人々を、最も下に位置づけた。このように身分階層を分け、全人口からすれば圧倒的少数の非漢族で帝国を支配したのである。中国の統一を果たした元では、紙幣が流通し、経済がふたたび発展した。それは、さらに世界貿易と結びついた。

モンゴル高原に残ったモンゴル人は、中央の権力に参加できず、不平をいだいた。他方の漢族社会も負担が大きく、支配はそれほど成功したものではなかった。特に、かつての南宋の北部で経済的な傷が大きかった。漢人は重要な地位につけず、漢人社会は活力をもてなかった。そのことが、すぐれた士大夫層の形成をさまたげ、知識人の質を低下させ文芸に影響した、と考えられている。宋が高みに上げた中国文化は、元の時代に活気を失ったと言うべきなのだろう。他方で、大衆化した文芸作品がつくられるようになった。小説『西遊記』、『三国志演義』、『水滸伝(すいこでん)』などの原型ができた。物語を戯曲に書いて、中国の演劇が発展しはじめる。

モンゴルの西アジア支配によって、イスラーム世界の文化が伝えられた。色鮮やかな陶磁器がつくられるようになる。中国の美意識が、宋代の洗練されたものから離れていく。科学では、西アジアの技術に刺激された郭守敬(かくしゅけい)が、天体の観測器を改良して、1太陽年が365.2425日という精度のよい暦をつくった。その暦は次の明代にも使われる。モンゴル軍は西から投石器を持ちこみ、火薬を使う砲は中国から西へ伝わった。モンゴルの世界帝国は、実用的な技術が伝わるのを容易にしただろう。人も、ヨーロッパ世界からモンゴルの領域にやってきた。君たちの知っているマルコ・ポーロは、長く元に滞在し、帰りは船で東南アジア・南インドを経て、西アジアから地中海へもどったのだ。日本が初めてヨーロッパに紹介された。

B. 日本の中世

日本の中世といえば、君たちは、太刀を帯びて馬にまたがり弓矢をもつ武士を思い浮かべるだろう。ところが、天皇の位のシンボルだった三種の神器(じんぎ)は、劍・鏡・玉からなる。両側に刃のあるまっすぐな劍は、敵を突き刺すのにすぐれる。武士が帯びている刀は、片側にだけ刃がついて湾曲し、馬上で敵を振りはらうように切るのにすぐれる。劍から刀への変化は、兵が馬に乗るようになった戦術の変化と関係していた。しかし武士の登場は、もっと深く社会の全般的な変化に基づいている。

変化した富の分配

昔も今もどの国でも、社会構造の基本は、人々の生産する富をどのように分配するかで決まっている。これまで見てきた世界史の根本もそれに尽きる。おじいさんはよく知らないけれど、日本の中世への変化を話すのに避けて通れないから、勉強し直して頑張ってみよう。

日本列島で中央政權が全国に支配を広げていくとき、諸国の富を一定の割合で中央に集める決まりがあっただろう。約60あった国々は郡に分けられていた。それらの地方行政単位は、昔からの社会共同体に根ざしていて、富の分配は古くからの習慣に従っていただろう。

701年に中央集權的な律令国家の体制が敷かれると、社会はしだいに変化していったと考えられる。全国の田畑を国家のものとし、班田と呼んで人民に割り当てて、

税を取った。しかしこの制度は、利害関係者が自分の取り分を多くしようとするから、時が経てばゆがめられる。貴族や寺院が水田のなかったところを開墾し、荘と呼んで私的に管理する土地が生まれる。地方政庁である国衙(こくが)も開発に参加していく。初期には租税を納めたが、国司(国衙の役人)の管理をのがれる土地が出てくる。公田(国衙領)ではない荘園ができる。支配体制がゆるむ800年代の終わり頃には、班田を実行できなくなった。

900年代に入ると、税をうまく集められなくなった政府は、諸国の長官(国守)に大きな権限を与え、朝廷・官庁や貴族・寺社などへの貢納物(年貢)を請け負わせるようになった。国守は、帳簿にのせられた国衙領を地域単位に分けて下請けに出し、有力者にそこを管理させる。郡・郷(ごう)やその下の名(みょう)などの単位があった。国守になった者は、荘園からも租税や雑役(庸)を取ろうとした。他方で、寺社や高位の貴族のもつ慣習的な特権を根拠に、税をまぬがれる免田が認められた。

役人の制度は奇妙なものだ。平安時代になると、国守が京都にいて給料だけをもることが多くなり、任地での国守の代行者を受領(じゅりょう)と呼ぶようになる。その受領も任地にとどまることが少なく、目代(もくだい)が実務をおこなうようになった。900年代に徴税請負人となった受領は、定められた負担分を国庫などに納めれば、徴収した残りをすべて自分の収入にできる。受領はたい

へん魅力的な役職となった。この制度が、中央政府の地方支配を変質させる一つの原因になる。

摂政・関白の位につく藤原氏(摂関家)が権力をにぎると、その周辺の中級貴族が受領に任命され、受領たちは在任中にさまざまな形で摂関家に荘園を寄進し、荘園が増えた。上皇が権力をふるうようになると、同様のことが起きる。受領に任命された者たちが、上皇の近臣として院政を支える。上皇や女性皇族などが、特定の国の受領を推薦する慣例もできた。院や宮が、受領を通してその国の収入を受け取るのである。院宮分国という。白河上皇の分国は24あったということだ。1000年代中頃になると、上級貴族がその子弟を諸国の国守に任命させ、その国の支配権をにぎって収入を得ることも始まった。その国を知行国(ちぎょうこく)と呼ぶ。中央政府の得るべき富を上級支配層で分配するようになった、と見ることができる。国衙領をふくめて、全体的に、諸国は私領化の道を歩むことになる。平家全盛のときには、およそ30国が平家一門の知行国だったという。鎌倉幕府が成立すると、関東八か国が将軍の知行国になる。

この全体的な流れの中で、国々で受領の下請けとして地域単位を請負った者たちは、自分も開墾を進めるなどして私領をつくり、その周辺に支配権を及ぼしていく。彼らは、郡司や郷司や名主の役職を世襲するようになる。こうして、在地の領主層が形成された。

院政期に入ると、土地の私領化の傾向を押しとどめることができなくなった。院(天皇家)・摂関家などの上層貴族や寺社は、国の制度に反して、荘園をとりこみ拡大していく。中級以下の貴族は、それらの荘園を管理する職を得ようと動く。地方では、土地の管理権を世襲した在地領主たちが、受領を仲介役にして上層貴族に荘園として寄進し、領有権を政治的に安全にしようとした。政治体制がゆらぐ中で、この寄進系荘園と呼ばれる荘園が広がる。上層貴族の荘園主は本家と呼ばれ、寄進を仲介した受領などは領家と呼ばれた。現地で管理する領主は下司(げし)と呼ばれた。それぞれ取り分を得るのである。

院宮分国や知行国の制度化が進むと、受領の力が低下する。国衙領も、地方官人が荘園の荘官に当たる役割を果たすようになり、荘園と似たものになっていく。院政期が終わる頃には、荘園と公領の区分を乱す動きが停止されて、荘園と公領が固定化するようになった。

武士の登場

平安時代には、地方の有力者の子弟を兵士にして、軍務につけた。今話したばかりの在地の領主層の多くは、そのような武芸に親しむ有力者の家から出た。武力を尊ぶのが在地領主のあり方になる。これが武士である。

ところで、皇族や貴族の子弟で京都の官職につけない者は、地方官庁の職について身を立てた。桓武天皇3代目の一人で、平の姓をもらって上総の介(かずさの国の次官)になった人物は京にもどらず、7人の子たちが関東の各地

で在地領主になった。次の世代の一人が平将門である。伯父たちとの争いが、939年反乱に発展した。反乱の平定に功のあった武士たちは、中級の官位をさずかり、受領などの役職を得た。彼らは、在地領主でありながら中央政府の貴族につらなり、武士たちのリーダーになる。その中に、将門のいとこの一人と、源の姓をもらって武蔵の介となった、つまり武士になりたての人物とがいた。平清盛と源頼朝の遠い先祖である。平清盛は桓武天皇から数えて11代目、源頼朝は清和天皇から10代目にあたる。もともと、皇帝の6代目で後漢を建てた光武帝でも、数多い同世代の子孫の中の一人にすぎない。桓武平氏の11代目や清和源氏の10代目の子孫の数ははるかに多い。あまり家系のことを言っても仕方がないだろう。

900年代の平将門の乱と藤原純友の乱は、在地領主である武士たちの軍事力の強さを見せつけたが、平氏や源氏などの官位は低く、中央政府で力をもてなかった。藤原氏が権力をもつ時代は、私兵のような立場で摂関家に出入りし、院政時代に入ると、院の北の詰め所で上皇につかえる兵(北面の武士)として出仕した。

朝廷権力の混乱、平氏の公武合体政権

社会の変化が政治状況を変え、政治がまた社会を変えていく。摂関家でも天皇家でも私領をもつようになって、古い民族的な意識はうすれ、個人の家意識が強まった。院政は、上皇と天皇との争いの種をまく。鳥羽上皇のとき、複雑な家族関係をきっかけとして、天皇家でも摂関

家でも権力争いが生じた。鳥羽上皇が死んだ 1156 年（保元 1 年）、後白河天皇と兄の崇徳上皇の争いは戦いになる。保元（ほうげん）の乱である。摂関家の長男と父・弟とが分かれてそれぞれの側につく。天皇方は有利に事をはこび、平清盛と源義朝のひきいる武士団が上皇方の立てこもる御所を急襲して勝利した。崇徳上皇は四国に流される。上皇方についた公家も流罪になり、平清盛の叔父や源義朝の父と弟などの武士は斬首の刑にあう。

天皇だった人の流罪は異例だし、死刑は 350 年ぶりのことで、「平安な時代」の終わりを告げていた。武士の軍事力が権力を左右することがはっきりした。武士自身もそのことを知った。

後白河院が権力をにぎると、中級貴族である近臣たちの力が増す。そこに勢力争いが起こり、武家の平清盛と源義朝との対立が生まれる。保元の乱で後白河天皇の参謀役だった藤原信西は平清盛を味方につけ、その敵対者藤原信頼に源義朝が近づく。1159 年（平治 1 年）、平清盛が熊野もうでに出たすきに、信頼・義朝側がクー・デターを起こす。しかし清盛が帰京すると天皇も後白河上皇も避難し、平氏が信頼・義朝を討った。平治の乱という。

こうして平清盛が武士団の頂点に立ち、覇権をにぎった。やがて、太政大臣まで進み、娘を天皇の妃にして、孫が安徳天皇になる。摂関家とも婚姻関係をむすんだ。平氏は、藤原氏のように、朝廷の体制の中で権力を行使したのだ。ただし多数の知行国をもち、軍事力をとみな

う強い政権であった。ところで、保元・平治の乱を戦争として見ると、保元のときよりも兵の数の多い平治の乱で、平氏が3000騎、源氏は1000騎ぐらい。騎士に従う従士を加えたとしても、全国的な戦争ではなく、まだ京都での権力争いだったと見ることができる。

平清盛は、積極的な政策を実行した。生産物が広い地域に行きかうようになり、宋の貿易船が博多や瀬戸内海に来るようになっていた。それに目をつけた清盛は、瀬戸内海の水軍を支配して、交易の利益を得る。さらに、みずからの荘園である福原(今の神戸)に港を開いて、南宋との貿易を支配下に置こうとした。

しかし、平氏一門が急速に権力と富を独占したことは、旧勢力の政治的特権や経済的な利益を奪うことであった。宮廷に平氏への反感が生まれる。後白河上皇は、のちに源頼朝から「日本国第一の大天狗」と皮肉られた人である。上皇周辺の人々は、平氏を倒したいと相談した。1179年上皇は、清盛の娘や息子が死ぬと、その荘園や知行国を取りあげると言う行動に出た。平清盛は、上皇を閉じこめ、上皇方の宮廷人の官職を奪う。

源平合戦 (げんぺいかっせん)

平氏の独裁政権が誕生したのだが、反平氏の世論がいつそう強くなり、政治状況はいつきに流動的になった。1180年、後白河上皇の皇子である以仁王(もちひとおう)は、自分の荘園を没収されたこともあり、父の意をくんで、平氏を討てと言う令旨(命令)を出した。皇子の挙兵に少数

の武士や僧兵が加わったが、逆に討たれてしまう。しかし、以仁王の令旨は諸国に伝えられて、内乱が広がるのは必至となった。平清盛は、都を福原へ移す。

源義朝の三男の頼朝は、平治の乱のときまだ13歳だったので殺されず、伊豆に流されていた。成長すると在地領主との行き来もできた。北条政子と結婚したのは、父の時政が当番で京都に滞在中のことだった。政子の兄弟はその相談にのっただろう。父が帰国すると、流罪人である頼朝から政子を取りもどす。頼朝には同じことが前にもあって、女の子は殺され、相手の女性はよそへ嫁がせられていた。ところが、政子は並みの女性ではなかった。父にさからい、夜の雨について頼朝のもとに走る。あえて不遇の夫を選んだのだ。父も認めざるをえない。いつしか頼朝のまわりには武士たちが集まる。以仁王の令旨が来たのは、頼朝33歳のときである。

身の危険のせまった源頼朝は、拳兵を決意し、親しい武士たちを呼んで参加を要請する。彼らはまだ頼朝の家来ではない。少数の武士たちが、伊豆の目代を奇襲して討った。しかし、神奈川県石橋山の戦いで、頼朝についた武士は300騎ばかり、追討軍は10倍あった。政子の兄は戦死し、頼朝は穴に隠れて命を助かるしまつで、東京湾の対岸にのがれる。ここから、関東の武士たちに、平氏政権から派遣されている目代を倒し、国衙の行政権を奪うことを呼びかける。それは、在地領主たちの要求に沿うものであった。初め頼朝追討軍に加わっていた者たちも含めて、関東の武士は反乱軍につく。

このように話していくときりがない。文学史上名高い『平家物語』を読んでくれたまえ。すぐれた物語に、日本人の行動様式を見ることができるだろう。

源頼朝は鎌倉に本拠地を置き、しばらく関東を出ずに基盤を固めていた。すると、頼朝のいとこの源(木曾)義仲が、1183年京都に攻めのぼった。後白河上皇は、義仲に平氏追討の命令を出す。すでに清盛を亡くしていた平家一門は、味方の多い瀬戸内海に落ちのびる。ところが、義仲の軍は規律を欠いて、朝廷の支持を得ることができなかった。上皇は源頼朝に接近する。この段階で、頼朝は、弟の範頼・義経の指揮する関東の武士団を送る。源義仲は敗走して、琵琶湖畔で討ち死にした。

その後の一の谷、屋島、壇の浦などの有名な合戦で、源義経が軍事的な才能を示し、1185年平氏をほろぼす。凱旋(がいせん)した義経は、上皇に手玉にとられて、頼朝を討つことを命じられるが、勝ち目はなく、戦争前まで世話になっていた奥州藤原氏のところへ落ちて行った。

鎌倉幕府、朝廷・幕府二重体制の成立

関東の武士団が全国的な戦争に勝利して、朝廷と政治的に対決する形勢になった。源頼朝は、平氏を追いつめていく段階で、諸国の武士を自分の御家人(ごけにん)とし、全国の軍事的な指揮権を要求した。1185年平氏がほろぶと、義経追討の軍勢を京都に送り、荘園と公領から兵糧(ひょうろう)を徴収する権利を勝ち取る。国々に守護・地頭を置く許可も得る。地頭は荘園・公領を管理する職で、

守護は国ごとの軍事指揮権をもち国単位の行政に力をふるうことになる。多くの武士が源頼朝の御家人になり、主従関係をむすんだ。日本の封建制のはじまりである。

源義経は、少年のころ奥州藤原氏を頼って行き、平泉で成長した。陸奥・出羽二国(東北地方)は、えみしと呼ばれた被征服民の国である。源氏の先祖を総大将とする戦争のち、1000年代終わりに、先住の豪族のあとを継いだ北関東出身の藤原氏が、半独立王国を築いていった。支配地は津軽海峡まで広がった。逃げてきた義経をかくまった藤原氏は、頼朝の圧迫に耐えきれず親しかった義経を殺すが、結局1189年、頼朝にほろぼされる。日本国の支配が、本州最北端まで及ぶことになった。現在の東北6県になったのは、明治新政府のときである。

1192年、後白河上皇が死ぬと、源頼朝は征夷大將軍に任命され、二重権力の体制ができた。上皇を頂点とする朝廷が、形式的な権威と実質的にも多くの権限を保ちながらも、軍事力をにぎる征夷大將軍の幕府が、守護と地頭を通して諸国で強い支配力をふるう。荘園の上級領主という立場など、京都側の既得権は残った。

西日本での支配力は弱かったけれど、鎌倉幕府が全国的な政権の姿をとるようになっていく。頼朝が従二位の位を得ると、その位に許された政所(まんどころ)が、家政の役所ながら政府として形を整えていく。御家人を統率する侍所と、訴訟を受けもつ文注所などの役所もできた。

源頼朝は、強い基盤をもって出発したのではなかった。1199年頼朝が死んで、子の頼家が2代將軍を継いだ。幕府の功臣たちは若い將軍の独裁的な姿勢を規制しようとした。いっぽう北条時政は、競争相手をほろぼしていく。頼家が危篤の重病になると、頼家の長男の外祖父を討つ。回復した頼家との対立が決定的になった祖父時政は、頼家の弟で12歳の実朝を3代將軍に立て、執権と称し幕府の実権をにぎる。2代將軍は翌年殺される。血なまぐさい権力闘争が続く中、政子・義時姉弟は父とその後妻と対立していた。北条義時は父を追放し、2代目の執権になる。成人した源実朝の『金槐和歌集』に、悲しみがにじむ。鶴岡八幡宮に参拝した実朝は、頼家の子に襲われて落命し、將軍家の世継ぎが絶えた。

さて、安徳天皇が海に沈むと、後白河上皇は別の4歳の孫を天皇にした。後鳥羽天皇である。三種の神器のうち劔は壇の浦で失われていた。上皇になると、鎌倉の不安定さを見て、朝廷の権力復活を目ざす。実朝が死んで、幕府が皇子を將軍に迎えたいと願ったが拒絶する。幕府は摂関家から將軍を迎えた。流罪人のときから頼朝に仕えた政子と執権北条義時が、後鳥羽上皇と対決する情勢になった。ところで、保元の乱の当事者の一人だった関白の子で、天台宗の座主になった慈円は、当時の知識人の一人だったが、歴史書『愚管抄』に、日本が武家の世に変わったと書いた。後鳥羽上皇が無謀な企てに走ることをいさめるためだった、とされている。

しかし1221年(承久3年)、後鳥羽上皇は、京都近辺から兵を集め、北条義時を討って守護・地頭を朝廷の支配下におくという命令を発した。これに対し幕府は、東国の大軍を送って平定すると、後鳥羽上皇を隠岐の島に流す。別の二人の上皇も流罪とし、新しい天皇を立てた。朝廷を監視するために、京都に六波羅探題を置いた。多くの領地を没収して、幕府方の御家人を地頭にした。幕府の力が、支配力の弱かった西日本にも及ぶ。やがて、皇子を将軍にすえ、幕府が次の天皇を選ぶようになる。

幕府が朝廷を圧倒し、執権が権力をふるうことになった。ただ、荘園領主の既得権は残された。幕府は、京都の領主と在地領主の両方を統制する立場に立つ。こうして、荘園・公領制と呼ばれる体制が整った。

元軍の襲来 文永・弘安の役

元のフビライは東アジアに君臨しようとした。南宋征服の準備中に、服属させた高麗を通して日本へ国書を送る。幕府に届けられた国書は、古来外交を担当してきた朝廷にまわされる。外交交渉は長く経験のないことであった。数度使者が来たが、幕府の方針から、日本側は返書を出さず、九州の御家人を動員する準備を進める。

1274年(文永11年)、元(漢人を含む)と高麗のおよそ2万人の軍勢が、900の船で朝鮮半島から出航した。大陸の軍は、対馬・壱岐などを制圧しながら、博多湾に現われる。上陸した元・高麗軍と九州の武士たちとの戦いのようすが、「蒙古襲来絵詞」に描かれている。日本人は、初め

て火薬を使った武器(テッポウ)を見た。一日の戦いに勝敗はつかなかったが、元・高麗軍は、勝利の見えない戦いからの撤退を決め、こつぜんと姿を消した。

皇帝フビライはあきらめない。若い執権北条時宗は、二度やって来た使者を斬らせた。この間、博多湾岸に防衛のための石垣を築いた。今も一部残っている元寇防塁である。南宋を倒した元は、大規模な遠征軍を編成する。

1281年(弘安4年)、高麗から約4万の軍勢と900の船が、江南(旧南宋)から約10万の軍勢と3500の船が出発した。早く来た高麗からの軍は、博多湾岸などで戦ったのち、江南軍と平戸で合流した。両軍の主力が伊万里湾入り口の鷹島に移動したのは、太陽暦8月下旬のこと。一夜、台風が元の軍船を襲った。元の主だった将は逃げ帰り、混乱した元軍に九州の武士たちが総攻撃を加える。10万人近くの大陸の兵が異国の地に果て、日本は外国による征服をまぬがれた。北条時宗は、自分の建てた円覚寺で日本と元の戦死者をとむらった。

鎌倉時代の産業と文化

鎌倉時代、産業が発達した。1200年頃600~700万だった人口が、100万人以上増加したという推計がある。農具に鉄器を使うことが普及し、二毛作が始まる。夏に稲を、冬に麦を栽培するのだ。1960年まで農村の風景だったよ。牛馬を使って耕し、肥料を与えることも始まった。農業生産の増大と並んで、農具や刀や生活用品などの生

産量が増えて、手工業が発展した。それにつれて商業が発展し、各地に市が立つようになる。日宋貿易で使われた宋銭が日本国内でも流通するようになる。年貢の運送は商品の運送に拡大し、問丸と呼ばれる業者が現われた。現物の代わりに為替(かわせ)の仕組みも登場するなど、後世に一般的になる経済上のさまざまな工夫が生まれた。

社会の変化につれて、武士や庶民の生活や意識に変化が現われる。貴族層を主な対象にしていた仏教が庶民に広がった。浄土教は、法然・親鸞(しんらん)によって普遍性を獲得する。しかし、旧仏教の攻撃を受けて弾圧された。法然と同じく流罪になって僧籍を奪われた親鸞は、結婚して僧ではない宗教者という新しい立場を開拓する。僧は妻帯しないという決まりを突きくずすことになった。他方で、中国の禅宗が日本にもたらされて、栄西・道元が南宋に留学して学んだ。禅宗は武士の生き方になじみ、武士のあいだに広がった。遅れて日蓮が現われる。『歎異抄』の親鸞は深い精神性を示し、道元の『正法眼蔵』はとても哲学的だ。京都や鎌倉に建てられた寺院は、新しい感覚を表現している。彫刻にも力強いものが現われた。君たちもいつか、東大寺南大門の運慶や快慶の金剛力士像を観る機会があるだろう。

すでに触れた『平家物語』は『源氏物語』よりも現代語に近い。新傾向の和歌を代表する藤原定家は、『新古今和歌集』の編集に加わった。日記『明月記』に、戦乱から距離を置いて和歌に徹しようとする決意を書いた。

同時代に鴨長明がいる。『方丈記』で、戦乱の世を鋭い冷静さで批判した。そのほか、おじいさんの紹介できない多くの文学作品がある。

「源頼朝像」として伝わる肖像画が、君たちの目に触れることがあるだろう。人間を見る確かな眼力と表現力があると見える。鎌倉時代の文物は、日本史の進展を示している。人間の生活と文化の全般について、鎌倉時代から現代まで大きな断絶がないように思われる。

室町幕府の成立、中世後期

外敵を防いだ軍事体制は、幕府の執権の権力を強めることになり、北条氏は多くの守護・地頭の職を占めた。これに対し、御家人たちの不満がくすぶるようになった。幕府成立から時が経って、各地に移住した武士たちは地域の関係の中に組みこまれ、守護の力が強まるなど、伝統的な支配に危機がひそんでいた。

しかし日本史年表を一見しても、合戦もなく、政治的な危機が迫っているようには見えない。そこへ、後醍醐天皇が1321年に院政を廃止したことが出てくる。じつは、天皇位を二つの系統が交代で継ぐ慣習ができて、対立が芽生えていた。後醍醐天皇が、大覚寺統の中でも一時的な中継ぎとして位につくと、自分の皇子に天皇位を継がせようとして混乱が生じる。個性の強い後醍醐天皇は、朝廷に権力を取りもどすことを目指すようになる。

ここから先、人間たちがどのように行動して歴史の舞台が回ったか、『太平記』という皮肉な名の書物が、入

り乱れて展開した戦乱の時代を語る。

数年すると、天皇の側近が討幕を相談していることが露見する。首謀者が斬られるなど、処分がおこなわれた。事態の推移はゆるやかだが、天皇の動きは続く。1331年、もう一度側近が捕えられて鎌倉に送られると、天皇は神器をもって奈良に落ちる。朝廷方は兵を集め、今の大阪府で楠正成なども挙兵するが、幕府の軍事動員体制はよく働いて、平定されてしまう。後醍醐天皇は、後鳥羽上皇のように隠岐の島に流され、幕府側は対立する持明院統の天皇を立てる。事態は静まったかに見えた。

ところが、皇子や楠は生き残っていて動き出し、地方で挙兵する者が出る。後醍醐上皇も隠岐から脱出して、戦乱が広がる。幕府は東國の大軍を送るが、その中の有力武士足利高氏が上皇方について、京都に置かれた幕府側の拠点が落ちた。関東でも、新田義貞が鎌倉を攻めて執権の北条氏を敗死させた。1333年、鎌倉幕府はほろんだ。後醍醐上皇は、対立する天皇を退位させ、ふたたび天皇位について権力をにぎった。漢を再興した光武帝にならい、年号を建武と変える。しかしその政治は、公家を優遇し、武士たちの支持を必ずしも得られなかった。

源氏の子孫の足利高氏が、北条方の反乱を討つ征東將軍に任命された(天皇の名をもらって尊氏と改名)。しかし、武家と天皇との対立は歴史の必然だったのだろう、目まぐるしくて長い内乱が始まった。一度九州に落ちた足利尊氏が、上京して天皇方の軍を破ると、持明院統の新しい天

皇を立てた。1336年、足利尊氏は、建武式目と呼ばれる法令を布告して幕府を開き、翌々年征夷大將軍に任命された。けれども、安定した政権が始まったのではない。このあと何度も、將軍が京都から逃げる。

後醍醐天皇は奈良県の奥に逃げて、退位したのではないと主張し、南北に二人の天皇が立つ南北朝の時代になった。幕府方と南朝方の戦いは、勝敗も入れ替わるほど複雑をきわめ、南朝が神器を取り返すことまで起きた。合戦は後醍醐天皇の死後も全国で続く。3代將軍足利義満の代になってようやく、幕府側がはるかに優勢となって妥協が成立し、1392年、南朝の天皇は神器を返す。以後二つの王統はまた交代で天皇位につく約束だったが、約束は守られず、北朝側が皇位を継承するようになる。

1300年代末頃、足利幕府の覇権はいちおう確立した。足利義満は朝廷での位を高め、それまで朝廷にあった多くの権限を獲得した。將軍は、公家と武家の両方を支配する君主のような地位となる。將軍の御所を京都の室町に置いたので、幕府を室町幕府、時代を室町時代という。しかしこの時代、いつもどこかで戦いが起きていた。

室町時代の政治・社会・文化

このような政治の動きと戦乱は、富の分配にかかわって、社会の変化に連動していた。中世社会が、変質を始めたのである。平安時代から残っていた京都の天皇家・貴族・寺社などの権門の既得権が、確実に失われていく。しだいに在地の領主層が取り分を増やして、生産される

富が以前よりも諸国にとどまるようになる。

将軍は、任命する守護を通して全国支配を進めようとした。守護は軍勢を集めるのに、兵糧(ひょうろう)や軍備の費用がいる。そこで幕府が、一部の国で、荘園や公領の年貢の半分を取ることを認めたら、その事例が広がった。旧勢力である権門の反発をふせぐために、彼らの荘園を除外する法令を出すこともした。いずれにせよ、守護は年貢の取り分を増やし、その支配力を広げていく。大きな力をもつ守護大名が生まれ、中小の在地領主を指揮権の下におくことが進む。室町幕府を動かしたのは、そういう有力な守護大名たちである。管領(執事)という役職についた者が、将軍の下で政務をとり仕切った。

その有力守護大名たちのあいだにも争いが起きる。足利幕府の初めの頃のように、統制がきかなくなり、管領と守護大名たちの大きな戦争が、1470 年前後 10 年ぐらい続いた。応仁の乱という有名な戦争だ。また京都が戦場になる。後半戦の「文明の乱」というおかしな呼び名の戦争はいちおう治まるが、1400 年代末に、管領が将軍をすげ替えた。将軍家の領地は減り、権威は失われる。

鎌倉時代に始まった二毛作などの農業の改良は全国に広がり、いっそう生産を高めた。年貢を納めても農民層に加地子(かじし)と呼ばれる余剰分が残る。荘園の単位は解体していき、のちに村となる村落共同体ができていく。諸国にある富が増えて、手工業や商業もいっそう発展する。各地に特産品が生まれ、広く流通するようになる。

たとえば、淀川沿いの大山崎で八幡宮に属する商人組織が、ごま油を販売したことはよく知られている。灯火が普及したのである。木材も大量に取引されるようになった。生活水準の向上があったと考えられる。住宅も改善したのである。室町時代のお寺など今も残っている建物に、床の間があつて畳を敷きつめたところがある。現代の和風建築につながっていることが分かる。

中国は明王朝に替わっていて、東アジアを中心に広く流通していた明の銅銭が日本にも大量に入り、貨幣経済が発展する。明の銅銭で取引をした。九州の領主たちは海外との交易に加わり、大陸沿岸を略奪する者たちが出た。明はその統制を日本側に望み、足利義満が貿易の利益をめざして、両政府公認の日明貿易が始まった。それは中国の伝統的な対外関係の形式でおこなわれ、足利義満は明の皇帝から日本国王に封じられた。

足利將軍家が最も栄えた義満のとき、京都北山に別荘を建てた。君たちも知っているその金閣は、室町時代初期の文化を象徴している。その頃の文化を北山文化と呼び、銀閣に代表される後期の文化を東山文化と呼ぶ。京都と鎌倉の五つの禅寺を中心に、中国の禅僧の影響を受けた漢文調の詩文が生み出された。その傾向にそまった建築や庭園がつくられ、中国から入った水墨画をひき継いで発展させた。名高い雪舟は、守護大名の大内氏の支援を受け、遣明船に乗って中国に渡ったのだよ。猿学・田楽などの演劇が能に発展したのもこの時代だ。能楽は

世界でも独特の、たいへん象徴化された演劇だね。その発展に力をつくした世阿弥は、『風姿花伝』で能の演技を論じた。喜劇である狂言も生まれた。公家や武士のあいだでは、何人かが集まり、五七五・七七の句を続けて連歌をつくる会がおこなわれた。また、中国から輸入した絵画や茶器などを愛好し、茶を楽しむようになった。この時代の文化の趣味は今も残っている。



孫に語る歴史 上巻

2013年3月 第2版

白江庵

